

169 おそれ戒めて慎みながら、帝の後ろの屏風に馴れるようにした（慎み慎みて帝に従ったものである）。

170 危ぶみおそれながら宝剣を撫でていたのである（おそるおそる帝に寄り添い補佐してきた）。

【十八段】

171 （また）黄色の土ほこりにまみれた俗習を惜しげもなく捨ててしまつて

172 宮中の殿上人たちと交際するようになった。

173 桜花を愛づる夜通しの宴にも出たし、

174 重陽の菊の節句の翌朝にある、菊酒の宴にも出た。禁中の親しいもの同志の私的な宴には、自分は毎回出席していた。

175 （私の）器量はにぶくて役立たずであるにもかかわらず、天子より豊かな恵み（官位）をうけ、頑固でおろかな身でありながら、巨川を渡る船の舵（宰相として政治）をまかされた。

177 〈それが今となつては〉国家（君）の恩に報い得ないまま

178 この鎮西の太宰府で左遷されたまま死んでしまうのではないかと恐れる。

179 晋の潘岳の家（故郷）を忘れたのではなく、宦官や小人に誣いられ閑居を余儀なくされて、不遇な目にあつた（と聞くし、）

180 漢の張衡は、官を辞めて野に下り、農耕生活を余儀なくされた（と書には書かれている）。

【十九段】

181 林の中で高く抜き出た木は、かならず風が吹き倒すものだ（今の私と同じように）。

（私も官位高きが故に左遷の憂き目に会つたのだ。）